
月が見つめる雪

和田梨樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月が見つめる雪

【Zコード】

N3141B

【作者名】

和田梨樹

【あらすじ】

ある雪の降る夜、青年は願いを叶えてくれると誓つ少女に出会つ。

青年の願いとは、いつたい…？

(前書き)

この小説は企画小説です。『雪小説』で検索すると、他の雪小説を読むことが出来ます。読んでみてください。

読む前に、この小説のジャンルが自分で良くわかつていないので、誰か教えて下されば嬉しいです。

「うわ、雪降つてやがる」

榎涼太は、顔をしかめて言った。

彼はコンビニのバイトが終わり、これから帰るところだった。時刻は19時20分。現在位置、バイト先である駅前大通りのコンビニ。

車通りも激しく、オレンジ色の街灯も点いていて、非常に明るい。彼は自宅に向け歩きだした。

「はあ…帰つたら、レポートも書かないとな……」

いかにも面倒くさそうに呟いた榎涼太は、二十歳の大学2年生。成績はそこそこで、『可』を取ったことは一度もなかつた。サークルには入つておらず、毎日をバイトしつつ、1人で気楽に生活している。

家族は彼を養子にした義父と義母の2人しかおらず、彼は本当の両親の顔を知らない。無理もないだろう。施設に預けられたのは、彼がまだ一歳の時のことだつた。その頃の記憶がある方が珍しい。

「そういえば…あの日も…雪だつたんだよな……」

涼太がボソッと呟いた。あの日とは、もちろん両親に捨てられた日である。彼はその日のことを義父に聞かされた……

……ある雪の降る真夜中、児童擁護施設『ホタルのすみか』の玄関のインター ホンが鳴つた。

偶然にも、所長がその日残業で徹夜していた。所長が玄関を開けると誰もおらず、足下から泣き声が聞こえた。下を見ると、そこにはバスケットに入っている小さな赤ん坊がいた。それが涼太だつた。

その後、涼太はそのまま『ホタルのすみか』に引き取られた。彼は小学四年までの時間をそこで過ごした。

彼を引き取つたのは、子供を作ることの出来ない若い夫婦だつた。

夫婦は涼太を高校まで世話をした。夫婦は大学まで世話をするつもりだったのだが、涼太はそれを丁重に断つた。彼は義夫婦にこれ以上、世話になりたくないかったのである。

話し合った結果、彼は一人暮らしすることになった。家賃などはバイト代から払い、敷金は義夫婦が払った。敷金も彼が貯金から払う予定だったのだが、夫婦が払うと言ったため、涼太はそれを有り難く受けることにしたのである。そして2年が過ぎ、現在に至るという訳である。

「つと、メールだ」

涼太は義母に無理やり持たされた携帯を、ポケットから取り出しメールを確認する。

「優子からか…」

優子とは、涼太が現在付き合っている女性で、本名は鳴原優子なるはらゆうこといい、彼の同級生である。

優子と付き合い始めたのは、高校一年の時で、涼太がまだ義夫婦の元で暮らしていた頃のことだった。

そして現在、優子は親元から涼太の家へ、毎日通っている。同棲を許して貰えなかつた優子が、通い妻という形で、涼太を支えているのである。

ちなみに一人は大学を卒業したら、結婚する約束をしている。お互いの親も認証しており、後は大学を卒業するだけだった。

そんな優子が送ってきたメールの内容はいつも通り、今から家に来るというものだった。

「んじやま、さつせと帰りますかね」

そう言いつつも、涼太は歩き出した。ここまで来たら、家はもうすぐなので走る必要はない。途中、公園を通りがかつた。ここを抜けていくと、少し早く家に着く。

「公園、通つてくか」

涼太はただなんとなく公園をることにし、中に入つていった。

枯れた並木道を通る涼太。電灯は点いてはいるが、昼並みの明るさはもちろんない。まあ女性ならば、一人歩きは遠慮したい場所だつた。

だからだろう。榊涼太がその少女のことが気になつたのは。

彼女は並木道にあるベンチに一人座り、俯いていた。涼太はなんとなく気になり、足を止める。

「子供が出歩くような時間じゃないのに…何してんだ?」「

そう呟いた涼太は少女に近寄り、なんとなく話しかける。

「おい、こんな時間に何してんだよ?」

少女は顔を上げる。見た目は小学生で、これで大人だということは、漫画ぐらいしかありえないだらう。

「子供がうろつくな時間じゃないぞ。さつさとお家に帰りな」

涼太は少女に優しく言つた。しかし少女は立ち上がる気配がない。

「おい、お前。こんなところにいたら、変なおじさんに襲われるぜ?
早く帰れよ」

涼太は少し厳しい声で言い、少女の腕をつかみ立たせようとした。しかしつかんだ瞬間、異常なほど冷たい肌に驚き、手を離す。少女が口を開く。

「あなたを、待つていました」

「俺を…待つて…いたつて……?」

涼太は再び驚く。しかし、彼女は涼太の言葉を無視して、さらに続ける。

「あなたは今、叶えてほしい願いはありますか?」

涼太は絶句した。この少女は何を言つてているのか、と言つような表情で。

「ああ、私は変な宗教団体の人じやありませんからね」

「…………」

どうでもいいことを言つた少女に、呆然とする涼太。そんな中でも、雪はしんしんと降り続いていた。

「で、連れて帰つてきちゃつたんだ」

「ああ」

涼太は優子に、少女を自分の家に連れてくるまでの経緯を話した。あの後、優子のことを思い出し、一人で家に帰ろうとした涼太だつたが、少女をその場に残して行くのは忍びないと思い、一緒に連れていつたのである。

ちなみに少女は現在、床に座つてヒーターの近くで暖まっていた。「どうか、涼ちゃん、犯罪者に見えたよね」

確かに、小学生ほどにしか見えない少女を、部屋に連れ込むという行為は、犯罪にしか見えない。

「自分でも軽く犯罪っぽいと、思つてたぞ」

「軽くどころか、完璧に犯罪者だよ」

優子は断定するように言つ。涼太も流石に黙つていなかつた。

「おいおい、一応彼氏を信用してくれよ。悲しくて涙が……」

「ああ、よしよし。泣かないの」

涼太は優子の膝枕で寝つ転がつていた。そんな涼太の頭を優子の手が優しく撫でる。……彼らは俗に言つ、バカツブルだつた。

そんな様子を冷ややかな目で見つめる少女。2人はその目線に気づき、慌てて姿勢を正す。そして涼太は少女に話しかける。

「暖まつたか?」

「クリと頷く少女。涼太はそれを聞いて、再び口を開く。

「名前、教える。このままじゃ、語り部が語りづらいだろうが」「語り部の気持ちを代弁した涼太に感謝しよ。……つと、個人的な

感情が…

まあ、そういうわけで少女は名を名乗つた。

「私は、三上紗耶みかみやといいます」

「紗耶か…、よし、じゃあ住所は?」

「…………」

涼太はそう訊いたが、紗耶はそれには答えない。優子が涼太の耳元で小声で言つ。

「たぶん、言いたくないんだよ。とりあえず、紗耶ちゃんが言つ氣になるまで待とうよ」

涼太は頷き、紗耶とさらに会話を続ける。

「何で紗耶は公園に居たんだ？」

「あなたを…待っていたんです」

「願いを叶えるために？」

「ええ、そうです」

涼太と優子は訝しげに紗耶を見た。紗耶はそんな二人を見ると、おもむろに立ち上がり言つた。

「じゃあ証拠を見せましょう。優子さん、あなたの願いを、何でも言つてみてください。私が叶えますから」

「願いつて、そんな簡単に叶えてもいいのか？」

涼太は疑問を口にした。紗耶は、

「ルールを守つてるので、大丈夫です」と疑問に答える。…ルールとは何なのか…ただ涼太はそのことが気になつた。

すると、実験台となる優子が涼太を見ていた。

「付き合つてやれよ」

涼太は優しく言つてやつた。

それを聞いた優子は少し考えてから、紗耶に願いを告げた。

「私は死んだおばあちゃんに、逢いたい
死んだおばあちゃんつて……」

「鳴原今日子、享年72歳。一昨年の夏に、脳梗塞で亡くなっていますね」

二人は驚いていた。高校三年の夏、確かに優子の祖母は脳梗塞で亡くなっていたからである。

だからといって、紗耶の言っていることを信用したわけではなかった。

「では、逢わせてあげましょう」

不意に、周りの空気が変わった。ピンと張りつめた空気。何か起

こりそうだと、涼太が思った瞬間だった。

涼太と優子はベッドの傍らに、誰か立っていることに気がついた。その人物の顔を見た時、一人は背筋が凍つた。

「あら、一人とも。久しぶりね」

それは、死んだはずの今日子だった。

涼太が今日子と初めて会ったのは、高一の時だった。涼太は優子に招待され、彼女の家に行つた時に、一人を出迎えたのが今日子だった。涼太は出会つた時のこと、今でも覚えている。今日子は初対面の涼太に、

「あら、優子の彼氏さんかしら。優子もなかなか男を見る目が高いわね。ああ、そうそう。今日、優子の部屋に泊まつてつてもいいからね。早く孫の顔が見たいからねえ」

こう言つたのである。涼太は赤面して、同じく顔の赤くなつた優子とともに、優子の部屋に向かつたのだった。

まあ……ちなみにだが、涼太はその日、自宅に戻らなかつたそな。

その後、涼太と今日子は、本当の孫と祖母のように話したりしていた。涼太も今日子のことを、本当の祖母のように思つていた。

しかし、今日子は呆氣なく亡くなつてしまつた。最後に聞いた言葉も、涼太は覚えていた。

「……私は……逝くけど、ね。優子の……ことを……幸せに、して……おくれよ……」

涼太はその言葉を聞いた時、泣いた。ただ悲しかつたのだ。優子も泣いていた。そして30分後、今日子は息を引き取つたのだった。

しかし現在。今日子は涼太の部屋にいる。高校2年の頃と同じ、元気な今日子が、そこにいた。

「なんだい、一人とも。私の顔を忘れたの？」

今日子は残念がる。涼太は確認するように訊く。

「今日子…婆ちゃんなのか…？」

「当たり前さ、涼太。アンタも元気そうだねえ」

今日子はカラカラと笑いながら言つた。涼太は紗耶の方へ振り向く。彼女はしてやつたりといった表情でこっちを見ていた。

涼太はこの少女が、嘘を言つていなかつたことを理解した。願いが…叶つたのだ。

「おばあちゃん！」

優子は、死んだ祖母に泣きながら抱きついていた。

「おやおや、優子はこんなに甘えん坊だつたかね？」

今日子は懐かしげに言つ。優子は、おばあちゃん、おばあちゃん、と何度も涙ながらに呴いている。そんな優子を今日子は優しくあやしていた。

「話さなくていいんですか？」

紗耶が横に来て言う。涼太は首を振り、紗耶に言つ。

「俺は…いいんだ。婆ちゃんが死ぬ前に、色々話したからな」

「でも…彼女は、後少しで消えてしましますよ」

「それはなんとなくわかつてた。…ああ、それでもいい。話すとさ、なんか泣いちまいそุดだから」

「そうですか…」

紗耶は、今日子と優子に目を向ける。一人はもはや、一人だけの世界に浸つていた。

「つーかさ。あれは邪魔出来ないだろ」

「まあ…そうですね」

そういう訳で、涼太と紗耶は、外に出ることにした。

外に出ると、雪はまだ降り続けつづけている。地面に少しだけ積も

つていた。明日は、雪かきをしよう、と涼太は思った。
涼太と紗耶は歩き出す。庭に行こうと思つたのだ。

「寒い…ですね」

紗耶は手を擦り合わせて言つ。すると涼太はポケットから、手袋を取り出し、紗耶に渡す。

「……？」これは？」

「使つていいぞ。俺は寒くないからさ」

「ありがとうございます」

紗耶は笑顔で言い、手袋をはいた。涼太はそれを見て、良いことをした気分になっていた。

やがて庭に着く。そして、紗耶が口を開いた。

「それで…願いは決まりましたか？」

「…………」

涼太は無言で答えた。紗耶はふう、と息をついた後に言つた。

「一応、願いは何でも叶いますから、迷うのも無理ないです。決まつたら、教えてください」

涼太は願いを真剣に考えることにした。

まず、涼太は自分の欲しい物を考えた。しかし、すぐに止めた。物は金を貯めれば、手に入るのに気づいたのだ。

次に優子のように、逢いたい人に逢うのはどうか考える。涼太は本当の両親を思い浮かべた。

「ああ、そうそう。あなたの本当の両親に逢うことも、もちろん可能ですよ」

涼太の考えが解るかのように言つ紗耶。

「そうか、逢えるのか……」

涼太は嬉しげに呟く。しかし、すぐにその表情は変わり、また、真剣に考え始めた。

10分後、涼太は紗耶を呼んだ。

「決ましたんですか？」

「ああ、決ました」

「では、改めて訊きます。あなたの願いは何ですか？」

涼太は自分の願いを告げる。

「俺の願いは……」

「ただいま」

「お帰りなさい、涼太」

涼太が部屋に戻ると、そこには優子だけしかいなかつた。

「今日子婆ちゃん、帰つたんだな」

「うん」

優子は明るく頷いた。涼太はホッとする。今日子が帰つていつたため、暗い気持ちになつていなかつたのが心配だつたのである。

「ん？ 紗耶ちゃんは？」

「願い叶えて、帰りやがつた」

涼太の願いを叶えた後、紗耶はこう言い、涼太の手袋をはいたまま、その場で姿を消した。

「私はそろそろ、空に帰らないと行けないのです」

涼太は、紗耶は天使だったのでは、と考えた。しかし、天使であろうと、なからうと、良太はどうでもよかつた。

「願い、何にしたの？」

「……教えてよ

涼太はそっぽを向く。優子は不服そうに言う。「ねえ、教えてよ」と。何でもしてあげるからさ~

それを聞いた涼太は、ちょいちょいと手で優子を呼ぶ。優子が寄つていくと、涼太は優子にキスをし、驚いている優子に言った。
「これからも、一緒でいよくな

「……うん！」

元気良く、優子は応えた。

そして一人は、寝室に入つていった。……まあ、愛でも確かめ合うんでしょう、たぶん。

ああ、そういうえば涼太の願いは、このようなものだつた。

「俺の願いは、俺の大切な人や、周りにいる人が、いつも幸せでいてくれることだ」

紗耶は不思議そうな顔で訊く。

「…自分のことじゃないんですね」

「ああ。俺が努力すれば、金も手に入るし、本当の両親にも逢える。でもよ…周りにいる人達、全員を幸せにすることは、俺には出来ないからさ」

「…わかりました。では、あなたの願いを叶えましょう」

紗耶の周りが光り出し、周囲が暖かい光に包まれ、光があちこちに散つていった。

「…これで、あなたの願いは叶いました」

紗耶は笑顔で言った。涼太も笑顔になる。

雪は既に止み、代わりに雲の切れ間から、満月が顔を出した。その光が、涼太を照らしていた。

本当の両親に逢えなくとも、金持ちはなくとも、彼はこれからも生きていけるだろう。

彼は一人ではないのだから。

(後書き)

読み終えた方へ、ありがとうございます。今後とも、頑張りたいと思ひます。

一応、ジャンルは恋愛ですが、これは違う、といったような意見があれば、遠慮なく作者まで申しつけ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3141b/>

月が見つめる雪

2010年10月8日15時20分発行